

「えっ、かんちょう？」

美夏は思わず聞き返してしまった。

こんなところで、そんな単語が出て来るとは予想もしていなかったのだ。ベッドで美夏の髪を撫でながら、三上は真剣に頷く。

「そうなんだ。僕にはそういう趣味が有るんだよ。」

ホテルのベッドで体を重ねるような関係になって、お互いの体の隅々まで知る間柄になっても、そういう行為は美夏にとって想定外だったのだ。

坂井美夏と三上智之は、いわゆる不倫の関係にある。

全国に支店のある会社の、地方の一支店、社員は二十名ほどの処で一緒に仕事をしている同僚だ。

三上は一年前にこの支店に転勤して来た、美夏の先輩だ。転勤当初から、二人は気が合った。

入社した頃から美夏は「ミカ」と呼ばれていたし、三上もこの支店に来る前から呼び名は「ミカミ」だったので、三上が転勤してきた時には、ちょっとした混乱が起こった。

そんな事も有って、お互いを意識したのがきっかけだったが、三上の歓迎会の中から二人は馬鹿な話をぶつけあうような間柄になっていた。

三上には妻が居て、一緒に転勤して来たのだが、東京の本社に居た頃から三上の妻は個人経営の店を持っていて、今でも週の半分はそちらに行っている。

子供も無く妻も不在がちな三上が、仕事で毎日顔を合わせている美夏と、深い関係になるのは、必然の成り行きだった。

また美夏も、三上を良い男としては見ていたが、それは仕事やセックスの上でのパートナーであり、それ以上の関係を求めなかった。

「もしも三上さんに奥さんが居なくても、あたしは結婚したいとは思わないわ。」

「ミカミミカなんていう名前になったら、舌を噛みそうだからね。」
同僚に仲の良さをからかわれると、そんな事を言って笑っていたのだ。

そういう言葉にカモフラージュされながらも、いつしか二人は、ベッドを共にする関係になっていた。

そして、お互いの体にも馴染んで、快樂のポイントや方法も熟知した頃に、三上はベッドの上で、そんな話を切り出したのだ。

「こうやって、ミカとセックスするのは、すごく気持ち良いんだけど、実は俺、ちょっと変な趣味が有るんだ。話すときすごく引かれるかもしれないけど、正直に言っておいた方が良いかと思うんだ。」

「何よ。もったいぶって。思わせぶりになにかカミングアウトでもするの？
実は男も好きな両刀使いだなんて言い出さないでね。」

ううん、そんなんじゃないんだけどね。」

「じゃあ何かな？何でも聞いてあげるから言ってみなさいよ。女を縛るのが好きとか、鞭で打たれたいとか、そういう趣味でも有るのかな？」

「どうだね。それに近いかもしれないね。」

美夏は内心でちょっと戸惑った。本当に三上が美夏を縛るような事をしたいと言いだしたら、それに応えるべきだろうか。

「実はさ。俺、お尻の穴に興味があるんだ。」

なるほど、そう言えば今までも、三上が美夏の敏感な核を舌で愛撫しながら、ついでのようにそちらに舌を伸ばした事もあったし、指先でその穴を突いたり弄ったりした事もあった。世間ではアナルセックスなんていう言葉も一般的に聞かれる。三上もそういう行為に興味があるのだろうか。

それにしても、美夏はそんなことは今まで考えた事も無い。三上がそれを求めたら、美夏のお尻の穴で、三上の男性自身を受け入れられるのだろうか。出来るのかもしれないが、もしかしたら初体験の時のように、かなり痛みを伴うかもしれない。

第一、排泄の為の穴に、それを受け入れても良いのだろうか。一瞬の間に美夏の頭の中にそんな思いが過ぎった。

「お尻って言ってもさ、アナルセックスをしたいとかかっていうんじゃないんだ。もっと簡単な事なんだけど、ある意味ではもっと変態じみてるかもしれない。」

「なによ。思わせぶりにもったいぶって。お尻の穴が好きなのね？お尻の穴に何をしたいって言うの？」

「あのね。実は、浣腸したいんだ。」

「えっ、かんちょう？」

「どうなんだ。僕にはそういう趣味があるんだよ。」

「かんちょうって、あの、便秘の時に使う、あれの事？」

「どう。その浣腸。お尻の穴からお薬を入れて、しばらくするとウンチがしたくなる、あれ。」

「それを、私にしたいの？」

「どうなんだ。美夏のお尻の穴に、浣腸をしたいんだ。」

「どうなの。かんちょうね...私にしたいんだ。」

「美夏は、浣腸された経験はあるの？」

「小さい頃に、一度か二度は有るわ。便秘になってお腹が痛いって言ったら、お母さんにされたの。」

「天人になってからは？」

「そんなの無いわよ。あんまり便秘もしないし、してもお薬飲んで何とかするもの。」

「じゃあ、子供の頃、浣腸された時の事覚えてる？どんな感じだった？」

「あんまり良くは覚えてないわ。お腹が痛くなって、ウンチしたくなって、したらすっきりしたくらいかな。」

「嫌だったとか、恥ずかしかったとかは？」

「どうね。小さな子供の頃だったし、母親にされたんだから、恥ずかしいと

か、あんまり考えなかったわね。」

便秘が解消してすっきりした記憶の方が大きいのかな。」
「そうね。どちらかと言えばね。それよりも、どうしてあなたはそんな事をしたいの？」

「それは、話せば長くなるんだけどね。」

「いいわよ。長い話でも。聞かせて欲しいわ。」

「僕は学生の頃、今の奥さんよりも前に、付き合いってた彼女が居たんだ。僕の大学の近くに有る看護学校の生徒でね。同じ年の子だった。」

看護婦の卵なのね。」

「そう、その彼女は当然、看護婦になるためにいろんな勉強をしていたんだ。その中には実習なんかも有る。包帯を巻いたり、血圧を測ったりなんていう初歩から、注射や採血のような専門的な事まで、実習をするんだ。」

「それで、もしかして浣腸の実習もするの？」

「そうなんだ。今だったら人形を使ってやるらしいんだけどね。」

「って言う事は、その彼女が実習をした頃は違ったの？」

「そう。採血も浣腸も、生徒同士がお互いに実習したんだ。」

「実習って言っても真似だけっていうんじゃないの？」

「いや。実際にお尻の穴から薬を入れたんだって。それも、普通のイチジクくらいのじゃなくて、注射器みたいなガラスの浣腸器で入れたり、点滴みたいにぶら下げるので入れたりしたって言うんだ。」

「そうなの。そんな事もするのね。大変なのね。」

「高校を出たばかりで、まだ二十歳前の女の子が、お互いにそんな事をするなんてね。」

「しかも、その実習はウンチするところまでが実習だったんだって。」

「えっ？ウンチもするの？」

「そうなんだ。看護婦は排泄の介助もやらなきゃならない。寝たきりの病人とかは、差し込み便器でベッドの上でウンチをさせなきゃならないんだ。」

「だから、浣腸の後の排泄の介助と後始末まで、実習でやらされたんだって。」

「もちろん看護婦の役も大変だけど、患者の役になれば、浣腸されてベッドの上でウンチをして、お尻を拭いてもらうのまでが、役割なんだって。」

「それで、彼女も？」

「そう。患者の役になったそうさ。役割はじゃんけんで決めたらしいけどね。」

「その頃はまだ、彼女もヴァージンだった。僕と付き合いはいたけど、セックスは未だだったんだ。そんな子が、お尻の穴を同級生に覗かれて、浣腸されて、ベッドの上でウンチまでさせられて、お尻を拭くのもしてもらったって言うんだ。」

「そんな、恥ずかしい事……」

「実習の終わった後で、その話を聞いたんだけどね。涙ぐみながら話してくれたんだ。今まで経験した中で一番恥ずかしい出来事だったって。」

「そうよね。二十歳くらいの女の子がそんなことするんじゃない。」

「それも、実際の病気か何かだったら仕方ないけど、実習なんでしょう。」

「それであなたはどうしたの？」

「もちろん、慰めてあげたよ。こういうのも立派な看護婦さんになるために」

必要な事なんだから、辛くても頑張るんだよって。」

「そうね、それでも言っておけるじゃないわね。」
確かに、自分がする立場になるだけじゃなくて、そうやって患者の気持ちを知る事も、看護婦としては大事な事だろうからね。」

「それで、あなたはお尻の穴に興味を持ちちゃったのね？」

「そうなんだ。それからしばらくして彼女とセックスをするような仲になったんだけどね。薄暗い部屋で、布団の中でお互いの体を探って、手探りでそこに僕のモノを入れて、それも気持ち良い事なんだけど、どうしても話に聞いた実習の様子を思い出しちゃうんだ。」

「自分がやった事じゃないから、余計におかしな想像が働いちゃうのね。」
「うん。昼下がりの光が差し込む実習室の窓際のベッドで、お尻をおき出しにされて、浣腸されて、そのままウンチがしたくなるまで我慢させられて、寝たままで便器にウンチして、お尻まで拭いてもらう。そんな彼女の姿が、目に浮かんで来ちゃうんだ。」

「なかなかリアルな想像ね。」
「もちろん。彼女からそう言う話を何度も聞きだして、イメージを作り上げたんだ。」

「そんな事をしつこく聞いたのね。そういう事はさっさと忘れさせてあげれば良いのに。」

「本当はそうなんだろうけどね。僕の方が忘れられなかったんだ。」

「それで？彼女とはどうなったの？」

「ある時、もう我慢が出来なくなって、彼女にお願いしたのさ。浣腸させてくれて。」

「もちろん最初は頑なに拒まれた。当たり前だけどね。」

「それはそうでしょう。」

「でも、何度も何度も頼みこんだんだ。こうやって恋人同士として体まで許しあっているのに、僕が知らない君の姿を、同級生が知ってるなんて、我慢できないってね。」

「最初は暗い部屋で灯りを点けるのも嫌がったんだけど、すこしずつお願いしたんだ。灯りの下で裸を見せ合う。指だけじゃなくて舌であるそこを刺激する。その時にお尻の穴まで見えるような体勢になってもらう。指先でお尻の穴もそっとタッチしてみる。」

「粘り強かったのね。」

「そう。彼女が、そんな事をする人は嫌い。もう別れるって言い出したら、全てを失うからね。」

「そして、ようやく彼女のお尻の穴にイチジク浣腸を差し込むところまでこぎつけた。」

「それも、最初は真似だけだよ。一滴でも薬を注入したら、もう二度とセックスしないなんて言われたんだよ。」

「でも最後にはしっちゃったんじゃないの？」

「うん。その時に約束させたんだ。本当に便秘になって、処置が必要になったら、僕に黙って薬を飲んだりしないで、僕にさせてくれてね。」

「その頃には、彼女も半ば諦めてたんじゃないかな。こんなにしたがるんだったら、許しても良いかなって。」

それで、しばらくして、そういう機会があった時に、彼女の方から言ってくれたんだ。

『今日はそのままお薬を入れても良いわよ』ってね。』

長い道のりだったのね。』

『そうなんだ。本当は、実習と同じように、目の前でウンチをさせて、お尻を拭いてあげるところまでしたかったんだけどね。それだけは最後まで拒否された。』

『当たり前でしょう。それこそ変態さんだわ。』

でも、彼女は一度そういう事をしてるんだよ。もちろん、それは実習なんだから僕との行為とは意味が違うけど、それでもやった事自体は同じ事なんだ。』

『それで？それからどうなったの？』

『実は彼女は割と便秘する体質だったらしい。それから何度かは浣腸をさせてもらったんだ。』

僕としては実習でやったようなガラスの浣腸器でやらせてもらいたかったし、ウンチも差し込み便器でさせて、お尻を拭くところまで、実習と同じようにやってみたかったんだけど、とてもそんな事は出来なかった。』

薬局でイチジク浣腸を買って来て、それをするだけだった。ウンチはトイレに籠ってして、きちんと後始末もしてから出て来る。』

でも、それだけでも僕は十分興奮したんだ。彼女にそういう恥ずかしい行為を強制的にやらせているっていう満足感でね。』

彼女も、こんな変態さんを相手にして、大変だったのね。』

でも、セックスを拒まれる事も無かったし、卒業するまでそういう関係は続いたんだ。』

卒業して就職する時に、遠距離になってしまって、結局別れちゃったんだけどね。』

『それで、あなたはすっかり浣腸に興味を持ってしまった。』

『ところで、今の奥さんにはそういう事はしないの？』

『ああ、あいつは普通のセックスでさえ消極的なんだ。まして、お尻の穴に触ったりすれば、それだけで大騒ぎさ。』

『そんなところ、汚い所なんだから触らないで！』ってね。』

『浣腸したいなんて言い出せば、それこそ離婚されかねない。』

『迫った事も無いの？あなたの事だから粘り強く攻めるんじゃないの？』

『いや、冗談めかして便秘の話をしたり、ダイエットのコーヒー浣腸の話題を出したりしたんだけどね。あなたに私のお腹の調子まで心配してもらわなくて大丈夫！』

『ダイエットするにしてもあんなことまでするなんて、おかしいんじゃない』なんて、冷たい返事ばかりなんだ。』

でも、あなたは浣腸やお尻の穴に対する執着が捨てられない。』

『私と言うセックスフレンドが出来て、もしかしたらこの相手なら、そういう思いを叶えてもらえるかもしれない。って、そんな事を思ったのね。』

ぞのとおり。もちろん君が嫌だって言うなら、無理やりにはしようとは思わない。でも、そういう男の夢が有るんだって事は、知っていてももらいたくないね。」

うん。変態くんの男の夢なのね。」

ぞうだよ。でも、昔は本当に変態とノーマルの境目ははっきりしていた。SMなんていうジャンルも、縛って鞭で打って、苦しい目に合わせるっていうだけで、浣腸も、その中の責めの一つとして使われるだけだった。

昔のそういう雑誌なんかは、そんな一面しか無かったんだ。浣腸の話が書いてある雑誌なんかを求めて本屋をうろろすると、そんな本しか無かった。でも、最近はそういうジャンルもソフトで多彩になってきている。一般的な会話のなかでも、SだとかMだとか使われるし、放置プレイだの羞恥プレイだなんて言葉が、若い子の口から出る事も有る。

エロ雑誌でも、お尻が好きとか、お医者さんプレイが好きとかっていう、専門の雑誌が有ったり、そういうDVDも出ていたりするんだ。」

なんだか、かなり研究してるのね。」

インターネットなんかだと、本当に世界中のそういう情報が見えるからね。僕は、相手を虐めるってよりも、恥ずかしがらせてその姿を観るのが好きなんだ。

Sって言えばSなのかもしれないけど、本物の変態さんっていうわけじゃないって、自分では思ってる。

それに浣腸ってけっこういろんな使われ方してるんだ。僕のようにお医者さんごっこ好きもそうだし、昔からの責めとしてもそうだ。自分がされるのが好きって言う人も、男女ともけっこう居る。もっと凄いのは、出て来たウンチが好きで、体に塗ったり食べたりなんてするような本当の変態さんも居るんだ。」

まあ、こういう行為は、お互いが同意の上でなら、何をやってもOKなんですよ。けどね。」

じゃあ、僕に浣腸させてくれるかい。」
ちょっと待ってよ。それはここですぐに返事は出来ないわ。考えさせてちょうだい。

あなたとのセックスは好きよ。でも、浣腸となるとちょっと私の思っているのと違うもの。あなたに求められたからって、すぐに『良いわよ』なんて言えないわ。」

ぞうだね。僕もこういう関係を壊したくないから、無理やりになんて言わない。

セックスだけで満足していればいいんだけどね。それ以上の事を君にしてみたくなったんだよ。もしも受け入れてくれるなら嬉いっていうところかな。」

美夏は考え込んでしまった。

三上との関係はとても良い距離感を持っている。セックスも満足させてくれる。三上の望みならば、叶えてあげる方が良いのだろう。

しかし、その内容は浣腸という行為だ。

世間一般では、便秘という病気の治療法のひとつとして普及している。病

院などでも必要ならばその処置がされるだろう。出産時には浣腸されるのが一般的な処置などという話も聞いたことがある。

一方で、排泄行為は他人にはなるべく知られてはいけないものというタブーも有る。もちろん、一日に一度の排便は誰でも当たり前前の事だ。それが無い方が困ったことになる。

でも、ウンチが出るなどと、他人に宣言することは、幼児でも無ければ有りえない話だ。まして、お尻の穴を覗かれ、そこに薬を入れられ、強制的に排便をさせられるとか、その様子を覗られるなどと言う事は、大人の女性としての常識からは有りえない。

病気になるって病院で処置を受けるのなら、命や健康に関わる事だと、決断も出来るだろう。そういうリスクと引き換えにして、何が何でも拒むという程のものではない。

だが、三上の望んでいるのは、どちらかと言えばセクシャルなプレイとしての浣腸と排泄という行為なのだ。

美夏はその返事を保留したまま、三上との関係は今まで通り続けていた。

三上がそういう機会の際に浣腸をねだるのは、さりげなく受け流していた。だが、何度目かの機会に、とうとうそれを許してしまった。浣腸の事を言いだしてから、三上は以前よりも濃厚に美夏の体を愛撫するようになっていた。

そして、その快感を与えられて、放心状態の時に、三上の要求に頷いてしまったのだ。

良いわよ。そんなにしたいんなら、私に浣腸させてあげる。」

三上は、あくまでも優しく、セックスの第二ラウンドを開始した。

快感のピークから、しばしの休憩を挿んでの事だ。

自分のバッグからイチジク浣腸の箱を取り出し、美夏にそれを行う準備をしてから、第二ラウンドに突入したのだ。

いつものように向き合って抱き合った体勢から、挿入したままで上手に体勢を変化させる。横に向いたり、背後から抱きしめたりしながら、やがて、美夏を四つん這いにして、後ろから挿入する体勢へと変わっていた。

そして、快樂の高みに登りかける寸前で、三上は行為を一時中断したのだ。「じゃあ、これから浣腸してあげるね。お腹が痛くなつて、ウンチがしたくなるかもしれないけど、それまでにはもう一度気持ち良くさせてあげるからね。」

そんな事を美夏の耳元で囁いて、イチジク浣腸を手に取り、美夏のお尻の穴にそれを突き立てたのだ。

浣腸の先端は抵抗も見せず、美夏のお尻の穴に侵入した。

お尻の穴も、すでに前の秘所からの愛液で濡れそぼって居たので、市販のイチジク浣腸の、ストロー程度の先端は簡単に挿入できたのだ。

三上はその先端を何度か出し入れした。今から自分が行う事を、ためらっているのか、感慨しているのか、美夏を焦らしているような行為を繰り返した。

そしておもむろに、美夏の耳元に囁く。
「じゃあ、これから浣腸のお薬を入れるからね。」
そう言うてからも、一気に浣腸を押しつぶし注入するのではなく、水鉄砲を試し打ちするようには、ちょっと注入しては止め、また再開したり、お尻の穴から抜き差ししたりして、同じ事を何度も繰り返すようにして、その浣腸の中身の液を、美夏のお尻の穴に注ぎ込んだのだ。

中身を全て美夏の体内に注ぎ込むと、三上は押し潰されたイチジク浣腸の容器を投げ捨て、美夏の体への侵入を再開した。

まだ美夏の体内に入った液体は、効果を感じさせない。だが、三上の男性自身が異様に昂ぶっているのは、美夏の女性自身への侵入で判るような気がした。一回り大きくなり、堅さも増し、角度も上向きになったように思えた。三上の侵入を受け入れ、同時に三上の手によって、乳首や淫核を愛撫され、美夏の快感は急激に高まって行った。

だが、それと同時に下腹部の圧迫感、お腹を壊した時に感じるような急激な便意も、美夏を襲い始めた。
気持ちが良い。快感の高みに到達しそうな快感に包まれている。体全体が興奮し、全身の筋肉が緊張し、やがてピークを迎え脱力する流れに乗っている。

しかし、下腹部の不快感は、素直にそのピークに達する事を妨害している。それに、そのまま全身を脱力させて、ベッドに崩れ落ちれば、さっきされた浣腸の結果として産みだされるものを、ベッドの上に撒き散らす事になりかねない。

お尻の穴を解放する事だけは避けたい。
そんな美夏の思いは、肛門を引き締める結果に繋がりと、同時に、女性自身にもいつも以上の緊張をもたらした。

三上のスケールアップした肉棒と、いつも以上にきつく締めつける美夏のものとの、肉体的な相乗効果を発揮する。

また、念願の浣腸をしたという三上の思いと、こんな異様な状況で性行為を行っているという美夏の気持ちも、いつもとは違った激しい興奮を引き出している。

やがて二人はほぼ同時に快感のピークに達した。
後背位で繋がったまま、うつ伏せに美夏がベッドに倒れこみ、それに覆いかぶさるように、三上も崩れ落ちた。

だが、美夏の腸の中には、今にもカウンターがゼロになりそうな時限爆弾が潜んでいるのだ。

三上は自分のモノを引き抜くと同時に、指で美夏のお尻の穴を押さえた。
美夏もまた、自分の状況を考えて、破局が訪れないようにその部分を引き締める。

三上が美夏の耳元で囁く。
「すぐ素敵だったよ。このままぐったりとして居たいけど、もう君のお腹の中も限界に近いだろう。」

「こうやって押さえたままで、トイレまで連れて行ってあげるから、もうちょっとだけ我慢するんだよ。」
もちろん美夏もそのつもりだ。ここで出すわけにはいかない。
二人で抱き合うようにして、そっとベッドから起き上がり、お尻の穴を押さえられたままの姿勢で、トイレまで歩く。

ドアを開け、洋式の便座に美夏を座らせ、お尻の穴から指を離れた後も、三上は美夏の前から離れようとはしない。

美夏は懇願する。

「お願い、出て行って。そのドアを閉めて。」

そんな事を言わないでくれよ。僕が何をしたいかは知ってるだろう。

「お願いだから、最後まで僕の望みを叶えてくれないか。」

「だって... 恥ずかしいし... ウンチが出たら臭いよ。」

「良いんだよ、臭くても。それが当たり前なんだから。」

「そういう恥ずかしい部分や臭いまで全て含めて、僕に見せて欲しいんだ。」
「だって...」

「お願いだ。愛してるから、その人の全てを知りたいんだ。」

美夏、愛してる。」

すでに美夏の便意は限界に達している。

「頑張っているから、三上に見られる事へのためらいだけが、抵抗するパワーとして残っているからなのだ。」

だが、そのパワーも、三上の囁きで、最後の抵抗を放棄した。

「いやっ！出ちゃう！恥ずかしい！」

美夏は両手で顔を覆って、ちょっと涙ぐみながらも、三上の目の前で、羞恥の塊を次々と産み落としていった。

三上は、何も言わずその一部始終をしっかりと観ていたが、やがて美夏の産み落とすものが全て出つくしたのを確認して、ぐったりとしている美夏を優しく抱きあげ、トイレレットペーパーで注入と排出に翻弄された、美夏のお尻の穴を拭いてあげた。

もう美夏は抵抗もせず、なされるままだった。

その後、二人は一緒にシャワーを浴び、三上にされるがままの美夏は、全身を優しく丹念に洗ってもらった。

性器もお尻の穴も、シャワーのお湯で流し、石鹸の泡で清められた。
そしてベッドで抱き合いながら、死んだような深い眠りに落ちたのだった。

最初の浣腸プレイの後も、美夏は同じような事を求められた。

三上は毎回浣腸をしたがったが、美夏はそれを許さなかった。心の奥底で、それが自分の体に病みつきになるのを怖れていたのかもしれない。極限の状態での快楽と羞恥は、大きすぎる刺激だ。

最初の経験で、それを感じ取ってしまった美夏は、自分がそれに溺れるのに臆病になっていた。

だが、一度経験してしまうと、通常のセックスに物足りなさを覚えることもあった。

あんな小さなお薬がお腹に入るだけで、あんな苦痛を引き起こすし、セックスしながらだったら、あんなに興奮させられるなんて、もう一度、やってみても良いかな。

元カノさんは、ガラスの浣腸器でされたって言ってたけど、もっと沢山のお薬を入れられたのかしら。どんな感じだったんだろう。

彼が私に、そういう道具を使いたいって言ったら、どうしよう。

さまざまに思いが、頭の中を駆け巡る。

そして、何度目かの三上のおねだりに、頷いてしまったのだ。

最初の時と同じような、快楽を覚えると、なかなかその味は忘れられない。その後も、毎回ではないが、何度かに一度は三上との密会の度に、そういうプレイは繰り返された。

ねえ。こんな事を何度もやっていて飽きないの。」

そんな事はないさ。いつ見ても、君のお尻は魅力的だし、排泄シーンの羞恥は新鮮だからね。

逆にもしも君が、『浣腸して！出す処もしっかり観て！』なんて言い出したら、魅力は薄れるかもしれないけどね。」

そんな事、言うわけが無いでしょう。浣腸されたままでのセックスは興奮するし、気持ち良いけど、ウンチが出るのは恥ずかしいし、お腹が痛いのはイヤなものよ。」

うん。解ってるんだけどね。それでも、したいんだ。

本当に感謝してる。こんな我儘を受け入れてくれて。」

そんな会話をしている最中に、美夏はふとある事を思いついた。

ねえ。あなたは浣腸をされた事はあるの？」

「いや。いままで、そうやってしてあげた事はあっても、誰かにされたなんて経験は一度も無いんだ。」

「じゃあ、お腹が痛くなったり、ウンチが我慢できなくなったりするものも、自分では未経験なのね。」

「そうだね。自分がされるなんて、考えた事も無かったよ。便秘にもなった事は無いし、病気で医者に行っって、そういう処置をされた事も一度も無いからね。」

「それなら、今度は、私があなたに浣腸してあげるわ。」

「うん。ちょっと怖いかもしれないな。」

「何言ってるのよ。私にはあんなにしたがるくせに。良いわね。たまには立場を交代して、あなたもされる方の思いを味わってみなさいよ。」

「そうだね。確かに、そう言われれば拒むわけにはいかないよね。」

その日は、ホテルに入るとすぐに、三上が美夏に浣腸を施したのだった。新しく買ったイチジクの箱を開き、ひとつを美夏に使い、残るひとつは未使用だ。

「じゃあ、第二ラウンドは、いつもの役割と逆でやってあげるわね。」

美夏はそう宣言すると、ちょっと怯えたような三上に向かって、残り一個の浣腸を示す。

「今すぐにするのかい？」

「そうよ。さっきあなただっけて私にしたでしょう。今度は私があなを責める番よ。」

三上も、最前までの自分の行為を思うと、嫌とは言えない。

全裸でベッドに仰向けに横たわっている三上を見下ろすように立ち、美夏はどうやって三上に浣腸を施そうかと考えた。

「じゃあ、気持ち良くて苦しいっていう、何とも言えない感じを味あわせてあげるわね。」

「そういうと、三上の股間の天を指すモノに手を伸ばす。」

「私がリードしてあげるから、そのまま横になっていてね。」

三上の男性自身は、一度の快感の放出後も、天を指すように屹立している。美夏はおもむろにそれに手を伸ばす。

「この子が私に悪戯したがるエネルギー源なのね。自分のお腹が痛くなったら、どうなるのかしらね。しょんぼりしちゃうのかな、それとも、もっと元気になるのかしら。」

「そう言いながら、その肉棒を手で弄り、先端の透明な液を指先に絡め取る。」

「これをお尻の穴に塗って、準備するのね。」

それはいつも三上が美夏の愛液をお尻の穴に塗りこむのと同じ手順だ。

美夏は三上の膝を立てさせ、お尻の穴に指先を伸ばす。途中に有る垂れ下がった肉の袋は、もう一方の手のひらで包み込むようにしてそっと引っ張ってみる。

「ごっちは棒と違って堅くはならないのよね。こうすると痛いかしら。」

そんな事を言いながら、中の珠を手の中で転がすようにして弄ぶ。

三上はいままでされた事のない行為に戸惑っている。

「もうちょっと足を上げてね。お尻の穴がごっちに良く見えるようにね。そう言っって三上の手を膝の裏に回し、自分で足を上げるポーズを取らせる。」

「お尻の穴って、こんなふうになってるのね。こんなにしっかり見るなんて初めてだものね。オチンチンやタマタマだっけて、こうした事なんて無かったしね。」

「どう、こんなにしっかり見られると恥ずかしいかな？」

「あなたはいつも、私のお尻の穴やあそこを、こんなふうに見るなんてしないでしょ。そう考えると、それだけで恥ずかしくなってくるわ。」

「そんな事を言いながら、粘液をお尻の穴に塗りこむ。」

「こうやって弄られると、気持ち良いかな？このまま中まで指を入れてあげようか？」

指を入れたら、中にはウンチが有るのかな。指先に付いてきたりしたら汚いかな。」

美夏の指は、菊の花弁の中心を抉じ開けるように侵入する。

せいぜいが第一関節程度の侵入なのだろうが、初めてその部分からの侵入を受ける三上にしてみれば、それは未知の感覚だった。

あなたは、私のあるところにオチンチンを入れたり、こうやってお尻の穴を弄ったりするけど、自分がされるのは初めてでしょう。どうやってお尻の穴を弄て来るのは？気持ち良い？」

三上は無言で、自分の感覚に陥っている。

しばらくそうやって、お尻の穴を弄っていた美夏が、おもむろにイチジク浣腸を手にする。

「じゃあ、入れてあげるわね。記念すべき初体験ね。」

そう言いながら、イチジクの先端を三上のお尻の穴に挿入する。

三上は、今まで侵入された事など無い場所からの感覚に身構えたが、それはあっけないほど簡単に三上の体内まで到達した。

その感触は頼りなささえ思わせるほどだった。

三上が美夏に対して行うように、ちよっとずつ中身の薬液を注入する。

三上の腸の中の感覚も、冷たい液が少しずつ侵入してくるのを感じ取っている。

やがてイチジクの中身を全て注入し終わり、美夏はそれを抜き取って投げ捨てる、三上の男性自身に手を伸ばす。

「どうかな？まだ、ウンチをしたくはならないでしょう。それまでにどうしようかな？」

美夏はそう言いながらも、三上の肉棒を弄ぶ。

私の上に乗って、入れてあげようか？でもゴムを付けるのも面倒だよね。

「こうやって手で気持ち良くしてあげようかな？それとも唾えて欲しい？」
そう言って、おもむろに三上のモノに舌を這わせる。

三上の腸の中の液体は、徐々にその効果を發揮し始めている。

それはある意味で苦痛ではあるが、一方で三上の男性自身には美夏の指先と舌先で、甘美な快楽が与えられている。その相反する感覚の中で、三上は今までに体験した事のない興奮を覚えていた。

美夏が三上のモノを唾えるのは初めての行為だ。今まで、美夏の秘所を三上が攻める事は多かったが、美夏は攻められる立場にあまんじていて、せいぜいが三上のモノを握るくらいしか能動的な行為はした事が無い。

左手で竿の根元を握り、擦り上げ、先端は口に含み、舌を這わせる。右手は袋の中の珠を弄び、その合間に、お尻の穴の菊襞に攻撃を加える。

三上はじっと横たわって、自分に加えられる攻めの感触を受け止めている。
「このまま、指と舌で気持ち良くなっちゃうかな？それともお腹の方が心配で行けないかしら？」

美夏は自分が、浣腸をされたままで三上のモノに貫かれる感覚を思い出し、立場が逆になっている状況に喜びを覚える。

美夏の場合には、便意が限界に近付いても、三上のモノに貫かれて、強制的に快樂の高みにまで押し上げられてしまうのだ。ウンチが漏れそうな極限状態の中で、絶頂を迎える緊張感と興奮は、逆の立場になった時、三上も味わう事が出来るのだろうか。

男と女の体の仕組みの違いで、そこまで到達出来ないのかもしれない。美夏は、三上を攻めながらも、そんな事を思っていた。

やがて、それまでじっと美夏の攻めを受け止めていた三上が、全身をくねらせるように身動きを始める。相当便意も高まって、性的快感との両方が、限界に近くなっているのだろう。

言葉は発しないが、あえぎ声が漏れる。

「どうかな。気持ち良くなれそう？ゴムは付けてないけど、ピュッと出しても良いわよ。口で受け止めてあげるから。お尻の穴からは出さないでね。」

そんな事を言いながらも、指と舌で快樂を与えるのを止めない。私だって、もう漏れそうで限界っていう状態で、あなたに攻められて、行かされちゃうんだから。あなたも同じように、行くまで頑張ってるね。」

三上もそれは理解している。美夏を攻める時には、こうやって極限を味あわせているのだから、自分もそれと同じ運命を受け入れるべきだという覚悟も有る。

すでに全身の筋肉は緊張して、お尻の穴と肉棒の二点に感覚は集中している。

やがて耐えられなくなった三上は、美夏に許しを求める。

「もうダメだ。行く前に漏れちゃうよ。お願いだ。トイレに行かせてくれ。」

「あら。最後まで気持ち良くならなくても良いの？残念ね。」

「もう無理だよ。このままじゃ前と後ろから同時に出ちゃいそうだよ。」

「それは困るわ。仕方ないわね。トイレに行かせてあげる。」

美夏はそう言って、三上が体を起こすのを手伝うと、一緒にトイレへと向かう。

トイレでは当然のように、便座に座る三上の前に立ち、三上の排泄を観察する。

三上もいつもは自分が行っている事なので、拒む事は出来ない。やがて三上にもグリセリンの猛威の前に敗北する瞬間が訪れた。

浣腸初体験なのだから、なおさら便意に抵抗は出来ない。美夏の見守る前で、浣腸の結果を流出させたのだった。

三上の男性自身は、まだ満足の結果を吐きだせず、硬直したままだ。

便意が去り、緊張感を失ったお尻の穴と対照的に、肉棒だけが屹立している。

美夏は、三上のお尻の穴をトイレレットペーパーで丹念に拭きながら、それに目をやる。

「ごっちは、お腹の中のものを出しても、関係無く元気なのね。」
「そう言いながら、それに手を伸ばす。」

「じゃあ、こっちも満足させてあげましょうか。それとも、浣腸の初体験の余韻でそれどころじゃないかな？」

「いや。そっちはそっち、これはこれで、また別の話だからね。」

三上はそう言って笑う。

美夏の気持ちもなんとなく解る気がするよ。恥ずかしかったり、お腹が痛かったり、興奮したりね。」

「そう。解ってもらえれば嬉しいわ。」

それに、君が攻める立場になった時の、積極的な様子も初めて見せてもらったしね。」

「どう？される立場になるのは。」

「うん。啜ってもらって、舌で刺激されるのはとっても気持ち良かったよ。」

今までしてもらった事が無かったものね。」

「お尻の穴を攻められるのも良かった？」

「ああ、いままで知らなかった感触だったよ。」

「浣腸するのと、されるのは、どっちがお好みかしら？」

「そうだね。されるのも、独特の興奮が有るけど、やっぱり美夏にしてあげる方が好きかな。」

「やっぱりそうなのね。いいわ、これからもさせてあげる。でも、時々は交代しましょうね。」

「ああ、良いよ。君もされるだけじゃつまらないのかな？お互いに両方の立場を味わうのも良いだろう。君も積極的になるしね。」

そんな会話をしながら、二人はベッドに戻った。

「じゃあ、これからあなたが満足するまで、してあげるわね。どんなふうにして欲しいかな。」

「そうだね。あそこに入れるのも気持ち良いけど、さっきみたいに舌でやってもらうのも、今まで無かったから、して欲しい気はするな。」

「解ったわ。啜えて舌で刺激して、ピュッと出るまで気持ち良くしてあげる。」

「口で受け止めてあげるから、遠慮しないで出しちゃって良いわよ。そのかわり、私のお尻も気持ち良くしてね。」

「もちろんだよ。前も後ろも、丁寧に舌で刺激して行かせてあげるよ。」

そして、二人はお互いの股間に顔を埋めて、快樂の続きをおさぼり始める。

二人とも、お尻の穴の快樂も味わってしまったから、前と後ろの両方で刺激を受け止め、羞恥さえも快感に繋がるような極みを、体が覚えている。

この先も、お互いの快樂のツールとして、ピンクのイチジク型の道具が二人をより深く結び付けていくのだろう。

二人して、そんな予感を覚えていた。